

日本のポンペイ

～ 渋川市の遺跡を探る ～

No.20

『金井下新田遺跡(3)「囲い状遺構」の役割』

前回と前々回、金井下新田遺跡で見つかった「囲い状遺構」について詳しく紹介しました。強固な塀で約50坪四方の空間が厳重に囲まれ、内部には極めて大型の竪穴住居1棟と高床式建物2棟が整然と配置されていました。また、囲いの内外では、大がかりなカミまつりが繰り返行われていた祭祀跡が何カ所も見つかっています。この一帯が、通常の生活空間とは異なる、カミまつりなどを行うための特別な場所だったことが分かります。

ところで、この「囲い状遺構」は、この地を襲った榛名山の大噴火が勃発する以前に使われなくなっていました。内部の竪穴住居や高床式建物の解体工事が行われていたことが分かっているからです。ただし、噴火の時期から大きくさかのぼるわけではなく、その何年か前といった程度です。当時のカミまつりは、今でいえば、政治と密接に結びついた行為で、地域集団のリーダーが中心になって行ったと考えられています。そこで思い浮かぶのが、本遺跡のすぐ隣の金井東裏遺跡で見つかった「甲を着た古墳人」の存在です。



囲い状遺構の南側隣接地の祭祀跡
(写真提供: 県埋蔵文化財調査事業団)

ただし、彼は囲い状遺構が解体された時はまだ生きていましたから、自らが主導するカミまつりの場を解体することは考えにくいところです。この時代は、地域首長の代替わりごとに祭政の場を新たに設けたと考えられています。本遺跡の囲い状遺構は、甲を着た古墳人の先代が関わったもので、彼が主導した囲い状遺構は、別の場所に残っているかもしれません。

(県立歴史博物館 特別館長 右島 和夫)